

『欲望と純潔のオマージュ』

著：華藤えれな

ill：三雲アズ

その日から、二人は少しずつ親しく話をするようになっていった。

もっとも留学生の彼は作品創りや勉強に忙しく、一方の自分は入退院をくり返している母の状態がよくなかったのも、それから数カ月間は大学や近所の道ですれ違う時に簡単な挨拶をするくらいのも、顔見知り程度の距離を保ったままだった。

そんな二人がプライベートで会うようになったのは、京都の街を霞むような桜が一斉に咲き競(きそ)う春のことだった。思案顔で下宿近くの公園にいるカレルを見かけ、蒼史が声をかけると、彼はこのあたりにひとりで作業に集中できる窯元を探していると答えた。

「カレル、陶芸にも興味があるの？ 専門でもないのに」

「ああ、木彫や彫金、石像や灯籠、いろいろやってみたが、ただの土からモノを創る作業をやってみたくて。このあたりは京(きょう)焼(やき)の本場だし、これもチャンスだと思って」

「そうだね。ここらへんは気候風土が陶芸にあっているのか、京焼の里とも言われるほど有名なアーティストが大勢住んでいて、けっこう窯もたくさんあるから」

「ああ、だけど他人に窯を使わせてくれるようなところがないんだ。授業でひととおりは勉強したんだけど、火の調節や釉(ゆう)薬(やく)の使い方とかも含めて一から自分でやらせてくれて、なおかつ技術を教えてくれるようなところ。帰国するまであと半年。適当なところがないか、もう少し探してみるつもりだけど」

「でも、このへんの窯元はプロの陶芸家さんたちが仕事のために使っているから、カレルが自由に使うのは難しいかも……」

と言いかけ、蒼史はハッとした。

——そうだ……うちの窯なら……ずっと母さんが入院中で長く使用していないし、今ではおれが土をいじったりする程度だ。むしろ、使ったほうが手入れができていい。

そう思ったものの、気むずかしい祖父がどういう返事をするかわからなかったのも、カレルには下手に期待を抱かせないように何も話さず、帰宅したあと、蒼史は祖父に相談してみた。

広さだけが取り柄の静かな京の東(ひがし)山(やま)に建つ蒼史の自宅には、敷地の奥に本格的な京焼用の工房がある。かつては祖父と母が精力的に作陶していた大がかりな工房で、彼らの未完成の作品や習作が並べられていることもあり、他人を入れることは基本的に禁じられていた。

それでもカレルだと言えば、許可が下りるかもしれない。祖父ならば、彼が初めて作った陶器の形を見ただけでそのすばらしさを理解し、支援をしてくれるのではないだろうかと考え、思い切って言ってみたのだ。

「めずらしいやないか、蒼史が私にたのみごとをしてくるなんて」

二人で話す時は、祖父と蒼史は京言葉を使っていた。留学生と話す時は、できるだけ標準語に近い言葉を選んでいるが。

「彼の陶芸作品、綺麗な形をしているだけじゃなくて、触れるととっても優しいんです。そやからもっといっぱい創って、上手にならばったら、どんな作品ができあがるのか興味があって。週に一度くらいやったら、おれが責任をもつんで」

蒼史は祖父に彼の作品の湯呑みを見せた。どの角度から見ても美しい形。しかも手にとるとしっとりと掌に馴染み、やわらかいカーブが唇に優しく触れる。

それを手にした途端、祖父の顔つきが変わった。

「カレル・バロシュ、彼は……陶芸でもこんなに見事なものが創れるのか」

しみじみと感心したように呟(つぶ)やき、祖父は何度も何度も角度を変えて彼の作品を確かめた。

「惜しいな、陶芸でも一流になれるぞ、彼は」

「お祖父さんもそう思われますか？」

「たぐいまれな才能の持ち主やと思う。彼ならかまへん。むしろ才能を伸ばしてやりたい。蒼史、おまえが立ち会うなら、週に一度、日曜の午後にでも貸してやりなさい」

気むずかしい祖父がふたつ返事で承諾してくれ、そのことを告げようと、翌朝、彼を大学の正門で待っていた。

桜の花吹雪が舞い散るなか、彼は思いがけない朗報に驚いたような顔を見せた。

「いいの？ オレはすごくうれしいけど、自宅の窯なんて……」

「祖父がいいって言ってるから大丈夫だよ。感心していたよ、カレルの作品を見て」

「じゃあ、今回は、ありがたく蒼史の親切に乗っかっちゃうけど、結果的に蒼史を利用したみたいで申しわけないな」

「そんなことないよ」

「でも時間をとられるんだぜ。毎週、オレにつきあわないといけないのに、それでもいいのか？」

「いいよ、週末はいつも工房でいろんな母の手伝いをしていたから。簡単なアドバイスなら可能だし、なんなら祖父にアドバイスをもらうこともできる」

「おまえの祖父って、あの有名な巨匠だろ。オレみたいな素人にアドバイスなんて」

「それは君がそれだけの作品を創る人だからだよ。おれ、君からもらった湯呑み、すごく好きだし、もっと君がどんな作品を創るか見てみたいんだ。形が綺麗なだけじゃなく、触っていると、なんていうか、優しいぬくもりを感じて……」

称賛されることなど慣れているだろう。そう思いながらも、精一杯、自分の心に抱いていた言葉を口にすると、彼は少し目を見開き、また驚いたような表情を見せたあと、最後に淡い笑みをうかべた。

「……ありがとう」

少しばかり照れくさそうな、それでいてすごく幸せそうな、満たされたような笑みに、胸の奥がふわっとあたたかくなった。

自分の言葉や行為を純粹に喜んでもらったことに胸がはずむ。あまりにうれしくて気恥ずかしさをおぼえ、蒼史はカレルから視線をずらしてうつむいた。

「蒼史……桜、ほっぺたについてる」

彼は外国の人がよくするように、蒼史の肩に手をかけ、頬にそっと唇を近づけてきた。

お礼のキスをされるのかなと思ったけれど、彼は触れるか触れないかのところで唇を止め、蒼史の頬についていた桜の花びらをそっと唇でとった。

「……っ」

ふっと頬に触れた曖(あい)昧(まい)な感触にぴくりと身体を強ばらせ、見あげると、目を細めて彼がほほえみかけてきた。満開の桜の木漏れ日が彼の金髪をきらきらと耀(かがや)かせ、世界中が明るい光に包まれているような気がした。

「カレル……」

視線を絡め、カレルは蒼史の前髪を片手で梳(す)きあげてきた。

「オレの陶器よりおまえの骨格のほうが綺麗な形をしている。きめの細かい肌はつるつとしていて触感が信じられないほどなめらかだ。見ているとつい触りたくなる」

額や頬の形を辿るように長い指で触れられ、それが造形的な興味だというのはわかっているのに、なぜか胸がざわめき、ふいに鼓動が大きく響くような感覚に襲われた。

「そういうとこ、おまえの中身を表しているようで、いいなって思う」

「カレル」

「おまえのこと、モデルにして彫像を創ってみたい。一度、なってくれないか」

突然、カレルは何を言うんだろうと思ってびっくりした。変わり者だという噂があるのは、こういうことを口にするからだろうか。

「無理だよ、おれみたいな地味なの、彫刻のモデルなんて。おれ、そもそも、じっとしてることなんてできないし」

「いつかなってくれ、モデルに。おまえにはそれだけの魅力がある」

本気で言っているのか、それとも母がよくイタリア人の父から言われたという外国人特有の、お世辞なのか。

「魅力なんて……カレル、おれ、全然だめだから」

蒼史は照れ笑いした。目立たないよう、イタリアの血に気づかれぬようにと思うあまり、うつむきがちに過ごしてきた自分は、学生時代、クラスメートからも『暗い』だの『幽霊みたい』だのと言われ続け、誉められたことは一度もなかった。留学生の世話をするうちに、自分の外見を気にする必要がなくなり、ようやくふつうに顔をあげられるようになったくらい自分に自信がなかったのだから。

「何でダメだなんて決めつける。彫刻家のオレが言うんだ、信じろ。ふわふわして、優しく甘くて、そんな感覚をとどめておきたくて、おまえのいる空気ごとこの世に残したいって思わせるような、そんな魅力があるんだ」

本当に外国人は誉めるのが上手だ。母もこんなふうにイタリア人留学生に言われたことがあって本気になってしまったのだろうか。

「故郷を離れ、遠くにきているのに、オレ、なんかおまえといるとこの国にも馴染めるっていか、おちつくっていか、和(なご)んでくるんだよ」

過度な誉め言葉でもそんなふうに言われてうれしくないわけがなく、頬がどんどん火(ほ)照(て)ってきて困ってしまった。

ありがとう、モデルになる自信はないけど、君の言葉はうれしいよ……と軽くかわせず、どう返答していいかわからない自分が恥ずかしくてたまらなかった。

「そんなお世辞……言わなくてもいいよ」

きっと頬が信じられないほど赤くなっているに違いない。それを見られたくなくて蒼史は視線を落としてうつむいた。

「心外だ。オレはお世辞なんて口にしない。思ったとおりのことしか言わない」

カレルは少し傷ついたような声をしていた。

「ごめん、おれ……ただ……」

「ただ？」

「なんでもない……なんかごめん……変で」

自分が支離滅裂な反応をしているようで恥ずかしさが加速していった。なんでこんなに緊張しているのだろう。自分と同性の、外国人相手に。

トクントクン……という心臓の音を一瞬遅れて追いかけるように、あとからあとからこみあげてくるものがある。切なかったり淋しかったり狂おしかったり、自分の内側が妙におちつかない感情に揺れているのを感じた。

あとから考えると、この時から自分はカレルに強く惹かれ始めたのだ。

本文 p28～36 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>